vol.
10
Sep.2020

市史編さん広報紙

たちかわ物語

TA CHI KA WA MO NO GA TA RI

町制施行祝 駅前より東を見る 大正12年(1923)12月 立川市歴史民俗資料館蔵

表紙の写真は大正12年に立川駅の北口から東側を撮影したものです。写真の右手に見える「吾妻町」という町名は、当時、北口の東側エリア（現在の立川郵便局方面）を指す通称として使われていた呼び名です。鉄道の開通や立川飛行場の開設によって発展しつつある立川の姿を収めた一枚となっています。

第10号では、令和２年度刊行予定の『新編立川市史 資料編 近代２』に先駆け、部会特集にて立川の近代史の概要を紹介します。商業の拠点、そして軍都として発展していく立川の街の姿を、行政文書を元に読み解いていきます。「資料をよむ」では『立川文書以降の立川氏』と題し、令和２年３月発行の『新編立川市史 資料編 古代・中世』に掲載された立川文書について、戦国時代以降の立川氏をさらに詳しく紹介します。

目次

・第5回関連講演会のご報告……2
・部会短信……3
・部会特集（近代部会）まちの記録が語る近代の立川
～行政文書を中心に～……4～7
＊連載＊
・立川おっこぼれ話「西立川駅の養豚場」……2
・資料をよむ　～立川文書以降の立川氏～……8～11
・令和2年4月～令和2年9月活動報告……11
・資料・情報提供のお願い……11
・立川写真館 現代部会編……12
・刊行物紹介……12

第５回関連講演会のご報告

令和２年１月19日（日）、「米軍基地と砂川――闘争までの道のり」を共通テーマとし、現代部会の担当する『資料編 現代１』から、目玉のひとつとなる砂川闘争を中心として講演会を開催しました。

第１部　栗田尚弥氏（立川市史編さん現代部会　特定部会委員／國學院大學文学部講師）

「米軍戦略と飛行場拡張計画」

現代部会特定部会委員として立川基地関係資料の調査にあたった栗田氏からは、これまでの市史編さん事業で収集した米軍・米国資料を材料として、基地拡張計画を必要とした米軍の戦略や、拡張の実施をめぐる闘争を米軍がどのようにみていたかについてのお話がありました。

第２部　沖川伸夫氏（立川市史編さん現代部会　部会長／中央大学法学部兼任講師）

「敗戦後の砂川村勤労者組合の軌跡――地域文化運動から砂川闘争へ」

現代部会長の沖川氏からは、地元で闘争の一翼を担ったメンバーが在籍していた「砂川村（町）勤労者組合」にスポットをあて、地域の文化運動を担う団体としてあらわれてきた勤労者組合が基地拡張反対闘争に至るまでの過程についてのお話がありました。

会場となった女性総合センター・アイム１階ホールには、立川市内外から97名の方が来場され、講演会は盛況のうちに終了しました。

栗田尚弥氏

沖川伸夫氏

質疑応答

立川おっこぼれ話

西立川駅の養豚場

「不潔なもの、例へに豚の如しとの汚名があるが、豚の身体は清潔でつやつやとした毛並、秋陽を受けて銀の針のやうに輝いてまことに綺麗である」。これはかつて立川にあった子安農園立川養豚場の様子について中野七子（慶應義塾大学医学部食養研究所）によって記された「立川養豚場見学記」※1の一節です。西立川駅の北側、現在の昭和記念公園内にあったこの養豚場は、三菱財閥の岩崎輝弥が経営していた施設で、昭和16年に神奈川県に移転するまで、主に種豚の繁殖と出荷を行っていました。

▲上空から撮影した子安農園の絵葉書と注射を打たれる子豚（立川市歴史民俗資料館蔵）。豚の健康管理も養豚場の大切な仕事です。

「立川養豚場見学記」は慶応食養研究所の職員が子安農園を見学した際の記述で、「食養上数種の点が考慮された」飼料が与えられている様子や、徹底した伝染病対策が行われていることなどが描写されています。この記事によると、飼育場は「掃除と排泄物のよろしき処置」によって「特有の臭気」がない状態に保たれていたそうです。この清潔さによって冒頭に引用したような美しい豚の姿が保たれていたのかもしれません。掃除で集められた排泄物は肥料として利用されていたようで、収穫された八つ頭が「風味に良く、市場で好評を得て」いたと書かれています。立川養豚場については井上義治の「子安農園立川養豚場の記録」※2に詳しく記述されていますので、興味のある方は図書館等でご覧ください。（藤野）

※１「食養研究」第11巻11号 食養研究会編、昭和14年　※２『新立川市史研究 第一集』立川市教育委員会、昭和60年

部会短信（令和２（2020）年度前期）

先史部会

新型コロナウイルス感染症対策として、４月７日に国の緊急事態宣言が発令され、調査活動も休止しましたが、５月25日の宣言解除により、６月から調査を再開しました。６月19日にくにたち郷土文化館、30日に都立国立高等学校に出向き、昭和24年に国立高校考古学研究会が発掘し、平成21年に国立市が寄贈を受けた向郷遺跡資料を調査しました。また、市民の方から、大和田遺跡第２地点の調査資料を寄贈いただいています。大和田遺跡第２地点、向郷遺跡国立高校発掘資料には不明な点が多いのですが、それが少しずつ解消されつつあります。大和田遺跡第１・３・４地点と古墳の報告書の編集も進めています。

くにたち郷土文化館での調査

古代・中世部会

３月に『資料編 古代・中世』を刊行しました。資料編に掲載している史料については、４年以上に渡って調査を行い、遠いところでは大阪や京都にまで出掛けて、できる限り原本を見て確認するように心掛けました。古文書の原本調査では、法量を測り活字の誤りを訂正したうえで、料紙・筆墨・筆跡・花押・紙継・虫食いなど、文書形態に関する調査をとりました。原本調査でしか知り得ない貴重な情報など、特筆すべき事項は資料編に掲載していますので、この機会にぜひ手に取ってご覧ください。

今年度は、新型コロナウイルス感染症による影響で中断していた、古代中世遺跡・石造物の報告書刊行に向けた調査準備を進めています。

平成31年３月実施の立川市歴史民俗資料館での立川文書調査風景

近世部会

『資料編 近世１』の準備を進めています。緊急事態宣言の発令期間中は、テレワークで古文書の解読や原稿の執筆を行いました。柴崎村には良質な史料が多数残されていますが、資料編に掲載できる点数に限りがあるため、掲載史料の選択にも時間をかけています。

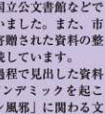
不要不急の外出を避けながら調査も行っています。立川市歴史民俗資料館、国文学研究資料館など近隣の機関での史料調査や、フィールドワークとして普済寺の墓石調査を行いました。新型コロナウイルス感染症の影響は編さん活動にも及んでいますが、より良い市史をお届けできるよう鋭意努力しています。

普済寺の墓石調査の様子

近代部会

令和２年度に刊行予定の『資料編 近代２』と令和４年度に予定の『資料編 近代１』の準備を進め、掲載する資料を選び、原稿化する作業を行っています。緊急事態宣言発令の影響で外部の調査ができなかった時期もありましたが、立川市歴史民俗資料館、東京都公文書館、国立公文書館などで資料調査を行いました。また、市史編さん係に寄贈された資料の整理・撮影も継続しています。

資料調査の過程で見出した資料に100年前にパンデミックを起こした「スペイン風邪」に関わる文書があります。大正９年（1920）２月２日の北多摩郡役所から砂川村への通達で、マスク使用やワクチン注射の普及が図られていることがわかります。



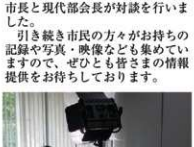
「流行性感冒ノ予防ニ関スル件」（立川市歴史民俗資料館蔵）

現代部会

令和３年度刊行予定の『資料編 現代２』に向けた資料収集に着手しました。しかし、新型コロナウイルス感染症の感染拡大により、作業の一時中断を余儀なくされました。その間は、これまでに集めた資料の検討などを行いました。

現在は、感染対策に留意しつつ資料収集を再開し、市議会に係わる公文書などを中心に、合併後の立川の道のりを跡づける資料の調査・収集に努めています。また８月にはCATV番組の取材を受け、市長と現代部会長が対談を行いました。

引き続き市民の方々がお持ちの記録や写真・映像なども集めていますので、ぜひとも皆さまの情報提供をお待ちしております。



J:COM「長っと散歩」撮影（立川市役所会議室にて）

民俗・地誌部会

新型コロナウイルス感染症の影響により、協力者の方々から直接お話をうかがう聞き書き調査を自粛しています。例年行っている祭礼調査についても、中止となった祭礼が多く、共同調査を実施できておりません。そのほか、立川市歴史民俗資料館収蔵資料の調査を行ったほか、けやき台団地自治会から資料を借用させて頂き、データ整理を進めております。新型コロナウイルス感染症の状況、及び、市民の方々のご意向にあわせ、調査活動を徐々に正常化させていきたいと考えております。

立川市歴史民俗資料館所蔵民具（スゲガサ）の実測を行う

会集部特
近代部会

まちの記録が語る近代の立川

～行政文書を中心に～

一昨年の平成30年（2018）は明治元年（1868）から150年の節目の年にあたり、「明治150年」と称したイベントが各地で行われたのは記憶に新しいところです。一方で本年は第二次世界大戦の終結から75年にあたります。近代部会は、明治維新から大戦終結までの77年間（明治元年～昭和20年）を担当します。

明治時代を通じての立川地域の主要産業は養蚕・織物・鮎漁などでした。明治22年（1889）、甲武鉄道（現JR中央線）の開通とともに立川は商業の拠点となり、大正11年（1922）、立川村北方に立川飛行場が開設、空都・軍都として発展しました。しかし、中国・アメリカ・イギリスなどとの全面戦争に突入すると、昭和20年（1945）に軍事関連施設などが空襲を受けて多くの人命と施設が失われました。

飛行第五聯隊（飛行第五大隊を改称）開隊記念日の聯隊正門前
昭和初期
立川市歴史民俗資料館蔵

現在の立川市は昭和38年に立川市と砂川町が合併して成立しました。それまでは砂川・立川の２自治体が市町村の運営にあたり、それぞれ合併や町制施行などを繰り返してきました。両者は、江戸時代の寄場組合や明治初期の区画ではその所属を別にしていましたが、立川駅の設置やや立川飛行場の開設によって関わりが深まっていきました。

近代の立川地域の足跡がたどれる資料＝「まちの記録」は多岐にわたります。ここではそのうちの、村役場・町役場・市役所で作成・保管された行政文書について紹介します。

飛行第五聯隊全景
昭和初期
立川市歴史民俗資料館蔵

立川町仲町通り（現、北口大通り）
昭和７年（1932）頃
立川市歴史民俗資料館蔵

管轄のうつりかわり

年代	立川	砂川
慶応4年(1868)6月	蕨山県設置	
	蕨山県の所管	蕨山県の所管
明治4年(1871)12月	廃藩置県後の第1次府県統合	
	神奈川県の所管	神奈川県の所管
明治6年(1873)4月	神奈川県区画改正	
	神奈川県第12区5番組柴崎村	神奈川県第12区3番組 砂川村・殿ヶ谷新田ほか
明治7年(1874)6月	大区小区制	
	神奈川県第12大区4小区柴崎村	神奈川県第12大区3小区 砂川村・殿ヶ谷新田ほか
明治11年(1878)11月	郡区町村編制法、郡町村制復活、多摩郡を西・南・北に分割	
	神奈川県北多摩郡柴崎村	神奈川県北多摩郡 砂川村・殿ヶ谷新田ほか
		明治12年(1879)12月 砂川村、平久保新田・殿ヶ谷新田・宮沢新田・中里新田・平沢新田の5か村を合併
		神奈川県北多摩郡砂川村
明治14年(1881)3月	柴崎村、村名改称	
	神奈川県北多摩郡立川村	
明治17年(1884)7月	区町村会法改正	
	神奈川県北多摩郡 中神村外九ヶ村組合立川村	神奈川県北多摩郡砂川村
明治22年(1889)4月	市制町村制施行 立川村は中神村外九ヶ村組合より分離、砂川村は立川村飛地などを併合	
	神奈川県北多摩郡立川村	神奈川県北多摩郡砂川村
明治26年(1893)	三多摩、東京府移管	
	東京府北多摩郡立川村	東京府北多摩郡砂川村
大正12年(1923)12月	立川村、町制施行	
	東京府北多摩郡立川町	
昭和15年(1940)12月	立川町、市制施行	
	東京府立川市	
昭和18年(1943)7月	東京都制施行	
	東京都立川市	東京都北多摩郡砂川村
		昭和29年(1954)6月 砂川村、町制施行
		東京都北多摩郡砂川町
昭和38年(1963)5月	立川市・砂川町、合併	
	東京都立川市	

地域のできごと

明治3年（1870）
玉川上水の通船事業が行われ、砂川村・宮沢新田などが参加

明治3年（1870）
柴崎村に郷学校（のち柴崎学校、現第一小学校）開校

明治5年（1872）
砂川村に私塾と共同学舎（のち合併して砂川尋常高等小学校、現第八小学校）開校

明治9年（1876）
西砂川学校（現第九小学校）の独立校舎建設

明治22年（1889）
甲武鉄道（新宿―立川）開通、立川駅開業
砂川村側の線路の北側に駅が開設、南口の開設は昭和5年。甲武鉄道は現JR中央本線

明治27（1894）
青梅鉄道（立川―青梅）開通

明治34（1901）
府立第二中学校（現都立立川高等学校）開校

大正11年（1922）
立川飛行場が開設、陸軍飛行第五大隊移転
民間航空の拠点でもあり、外国人飛行家の来訪が相次いだが、昭和8年に民間航空は羽田へ移転

大正14年（1925）
立川高等女学校（現立川女子高等学校）開校

昭和4年（1929）
南武鉄道（分倍河原―立川）開通

昭和15年（1940）
立川陸軍航空工廠設置

昭和20年（1945）
米軍機が立川市・砂川村を爆撃、犠牲者345名
立川飛行場・立川陸軍航空工廠・立川飛行機会社・日立航空機立川発動機製作所などを目標とした空襲

●立川地域の行政文書

近代部会は２冊の資料編を刊行します。大正11年（1922）の立川飛行場開設前後を画期とし、前半を『資料編近代１』（令和４年度）、後半を『資料編近代２』（令和２年度）で扱います。

「近代」を描くために中核となる行政文書は、立川市歴史民俗資料館所蔵の旧砂川村役場文書・旧立川市役所文書や、立川市文書庫保管の永年保存文書です。これらの文書群を合わせてみることで、立川や砂川の自治体としての足跡をたどり、当時の社会状況を明らかにすることができます。紹介した略図は砂川村・立川村の行政文書の中の、役場位置変更申請に添付されたものです。砂川村は「事務室其他採光悪敷」、立川村は「暗黒ニシテ事務取扱上不便」と、両役場とも移転理由の一つに事務上の不便をあげ、役場環境がうかがえることが注目されます。

行政文書が残されていることで、当時の自治体の課題やそれへの対応がわかります。また、過去に行政が行ってきた判断や実績を検証することによって、現在の業務に活かすことができるのです。

旧砂川村役場文書
立川市歴史民俗資料館蔵

砂川村役場印（大正11年）
立川市歴史民俗資料館蔵
旧砂川村役場文書

旧砂川村役場文書

砂川町・立川市合併後に旧砂川村役場庁舎内に残され、一時保管を経て、昭和60年に立川市歴史民俗資料館が開館するとそこに移管された文書群です。

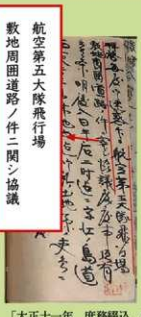
明治４年の韮山県所管時代や明治11年の砂川村戸長役場時代の文書も一部が引き継がれています。

永年保存文書

子ども未来センター内の立川市文書庫で管理されている文書群です。明治22年以降の立川村会議録や明治29年以降の砂川村会議録などがあります。

砂川村役場位置変更申請に添付された
砂川村略図（大正14年２月）
立川市歴史民俗資料館蔵　旧立川市役所文書

砂川の行政文書



「大正十一年　庶務綴込　砂川村役場」
立川市歴史民俗資料館蔵　旧砂川村役場文書

立川飛行場建設にともなう村道の付け替え（大正11年）

「大正十一年　庶務綴込　砂川村役場」に、立川飛行場建設に関わる記載がみられます。近衛師団経理部からの照会や、立川村からの協議のよびかけなどがまめられています。砂川村・立川村の村道が「航空第五大隊飛行場」すなわち立川飛行場の敷地にかかるため、付け替えが行われることとなりました。

砂川村の空襲被害（昭和20年）

「昭和二十年砂川村事務報告」に空襲被害の記載がみられます。「厚生一般時災害」の項に、村民の被害として、死者25人、負傷者13人、全焼115、全壊34、半壊111とあります。また、「学事」の項目には、４月24日の空襲で砂川国民学校が、８月２日の空襲では西砂川国民学校分教場が罹災全焼したと記されています。

「昭和二十年砂川村事務報告」
立川市蔵　中野家文書

旧立川市役所文書
（立川市歴史民俗資料館所蔵分）

旧砂川村役場文書と同時期に整理されていたと思われる文書群です。文書の上限は明治10年で、日露戦争の「動員日誌」や教育・庶務関係の文書があり、旧『立川市史』に文書が引用されています。

旧立川市役所文書
（立川市総務課移管分）

平成23年度に総務課から立川市歴史民俗資料館へ移管された文書群です。明治32年以降に旧砂川村役場が作成した文書も含まれています。

旧立川市役所文書
立川市歴史民俗資料館蔵

立川村役場印（大正11年）
立川市歴史民俗資料館蔵
旧立川市役所文書

●市民の持つ記録と記憶

立川市の歴史を描くために必要な資料は、立川市の行政文書だけではありません。国や都の機関で作成・保存された公文書や、民間の団体や個人で作成・保存された資料、立川地域に関わる新聞や雑誌の記事など多岐にわたります。町村制の「村」になる以前の、明治初期における戸長役場文書は、大部分が戸長をつとめた家に残されています。

また、町村制以降の自治体の行政文書は、作成・受領したもの全てがそれぞれの役場に残されるわけではありません。作成は役場の判断であり、その後不要なものは廃棄されます。一方で住民の側には役場の通達が残されたり、議員をつとめた家に議案とそれに関連する資料などが保存されていることがあります。

以上のような立川地域に関わる資料を内外から広く集め、資料編を編集します。これらは通史編や近代テーマ編の刊行にむけての基本資料となるものです。近代の立川地域は「交通のまち」「基地のまち」など様々な姿を見せますが、多角的な資料によってその変化を明らかにしていきたいと考えています。（高野）

立川村役場位置変更申請に添付された
立川村略図（大正２年１月）
立川市歴史民俗資料館蔵　旧立川市役所文書

立川の行政文書

立川飛行場建設にともなう隔離病舎の移転（大正11年）

「大正十一年一月　村会議録議案及決議　立川村役場」に、立川飛行場建設に関わる記載がみられます。伝染病隔離病舎は、感染防止のため各市町村に設けられ、立川村・砂川村では明治30年代に建設されました。立川村の隔離病舎が「航空第五大隊敷地区域」すなわち立川飛行場の敷地にかかるため、移転することになりました。

村隔離病舎ノ存在スル敷地（借入地）ハ航空第五大隊敷地区域

「大正十一年一月　村会議録議案及決議　立川村役場」
立川市蔵　永年保存文書

立川市の空襲被害（昭和20年）

「昭和二十年立川市事務報告」に空襲被害の記載がみられます。「災害防衛事務」の項に、市民の被害として、死者約300名、重軽傷者約400名、焼失戸数約300戸、破壊戸数約500戸とあります。また、８月２日の空襲で市役所本館に爆撃を受けたものの、市役所防衛本部員などによる消火活動で焼失を免れたことが記されています。

死者　約三〇〇名　重軽傷者約四〇〇名
焼失戸数約三〇〇戸　破壊戸数約五〇〇戸

「昭和二十年立川市事務報告」
立川市歴史民俗資料館蔵　旧立川市役所文書

資料をよむ ～立川文書以降の立川氏～

古代・中世部会委員　則竹雄一

はじめに

立川市には、平成13年（2001）に立川市有形文化財に指定された立川市歴史民俗資料館所蔵９通と平成29年（2017）に追加指定された同館保管の３通の中世立川氏文書の原本が存在しています。所蔵に至る経緯などについては、立川市教育委員会『中世武士立川氏関係史料集　立川文書』（2010年）にすでに書かれています。このたび、刊行された『新編立川市史 資料編 古代・中世』（以下、市史と表記）においても、中世の立川市域を知ることのできる中核的な資料として全文書が掲載されています。その一端は、すでに『たちかわ物語』５号「資料をよむ～立川文書に見る立川氏～」において鎌倉佐保氏によって解説されています。立川氏文書は、市域のみならず東京都全域で見ても、まとまった武家文書といえる資料がほとんど残されていない状況にあって、大変貴重な資料群として特異な位置をしめているといえます。その年代は、貞応元年（1222）の鎌倉時代から応永24年（1424）の室町時代中期におよびますが、戦国時代の資料は伝えられていません。市史編さんのひとつの課題は、立川氏文書以降の立川氏について明らかにすることです。ここでは市史編さんで蒐集された資料から戦国時代以降の立川氏に関する動向の一端を紹介したいと思います。

１、立川氏文書以降の立川氏

中世立川氏文書を伝えたのは、江戸時代の水戸藩に仕えた立川氏であることは、文書と共に伝えられた系図によって知ることができます（市史第四章系図一・二・三）。ところが、その系図には鎌倉時代末期から戦国時代までの途中が記載されず、水戸立川氏の直接的な先祖は、武蔵国八王子城主北条氏照に仕えた立川能登守までしかわかっていません。能登守の子宮内は、天正18年（1590）の八王子落城後に浪人となっていましたが、元和４年（1618）に、もとは氏照重臣であった中山家範の子信吉が水戸藩の家老となっていたのを頼り、水戸藩に仕官したとあります。立川氏の中世文書を伝えたことは、多摩立川氏の本流であった可能性が高いと考えられますが、戦国期における水戸立川氏の先祖の動向は関係史料が見当たらないことから、能登守・宮内父子の具体的な動向や中世立川氏文書の立川氏との関係は不明と言わざるを得ない状況です。ですので前述したように立川氏文書以降の多摩立川氏の動向を解明することは、大きな課題といえます。

他方、戦国時代には岩付城（埼玉県さいたま市）を本拠とする岩付太田（北条）氏の家臣（岩付衆）の中に立川式部丞・藤左衛門尉・伊賀守・山城守の四人が北条氏関係の史料に見られます。彼らを岩付立川氏と呼ぼうと思います（表１）。

永禄10年（1567）８月に上総国三船山合戦（千葉県富津市・君津市）で岩付城主太田氏資が戦死して、岩付領（現在のさいたま市域など）支配は、城代としての玉縄北条氏繁・氏舜、天正５年以降は北条氏政三男で太田氏資の名跡を継承した太田源五郎、天正10年７月の源五郎死去で城主となった氏政四男北条氏房によって行われました。このような経緯から岩付衆は、もともとの太田氏の家臣と新たに岩付支配に加わった北条家臣で構成されることになったと考えられます。多摩立川氏と岩付立川氏の関係は不明ですが、立河郷に隣接する高幡郷（日野市）の高麗氏の一族が岩付衆の中に見られることから（市史第一章編年史料789・790・817・829など）、岩付立川氏の出身が多

▼天正５年７月13日北条家印判状（国立公文書館所蔵『豊島・宮城文書』）を接続加工して掲載。

表１　戦国期岩付立川氏関係史料一覧

	年月日	文書名	関係文言	出典
1	元亀２年11月晦日	北条家印判状写	（岩付蔵奉行）立川式部	820
2	元亀３年５月７日	北条家印判状写	立川藤左衛門尉	822
3	天正元年７月29日	北条家印判状写	（岩付蔵奉行）立川藤左衛門	827
4	天正５年７月13日	北条家印判状	小旗奉行立川藤左衛門、鍵奉行立川式部丞など	829
5	天正８年７月２日	北条家印判状写	（岩付普請奉行）立川伊賀守	835
6	天正９年６月26日	太田源五郎印判状写	奉者立川山城守	845
7	天正10年８月朔日	北条家印判状写	（岩付蔵奉行）立川	847
8	天正11年７月28日	北条氏房印判状写	（岩付蔵奉行）立川	852
9	天正13年11月	新編武蔵風土記稿	足立郡薬林寺薬師堂造立立川山城守重義	858
10	天正15年正月６日	北条氏房印判状写	（岩付普請奉行）立川山城守	865
11	天正15年２月６日	北条氏房印判状	（岩付普請奉行）立川山城守	866
12	天正16年正月６日	北条氏房印判状写	かくせん立川分	868
13	天正16年７月３日	北条氏房印判状写	（岩付蔵奉行）立川	870
14	天正17年10月23日	原兵庫助訴状	（岩付検見奉行）立河山城守、同伊賀守	872
15	天正年間	新編武蔵風土記稿	武蔵国足立郡宝性院開基立川石見守	879

（奉行名）は文書内容からの推定。出典は全て『新編立川市史 資料編 古代・中世』第一章編年資料の資料番号。

摩郡であった可能性が高いと考えています。また、天文５年（1536）には高麗平右衛門尉が岩付城主太田資顕から知行の安堵を受けていることから（市史第一章編年史料789）、高麗氏がすでにこの時点で岩付太田氏の家臣化をとげているとみられ、多摩立川氏の家臣化も、北条氏の岩付領への侵入時期よりも古かったことを推測させるのです。

２、岩付立川氏の岩付衆（家臣団）での位置

立川式部丞の初見は、元亀２年（1571）11月晦日付けの北条家印判状写（市史第一章編年史料820）です。ほぼ同時期に登場するのが、立川藤左衛門尉です。初見は元亀３年５月７日付け北条家印判状写です（市史第一章編年史料822）。その後天正５年を最後に、式部丞・藤左衛門尉ともに史料から名前が見えなくなり、代わって立川伊賀守・山城守の名が散見されるようになります。伊賀守は、天正８年７月２日付け北条家印判状で荒川堰の普請奉行として初めて名が見えます（市史第一章編年史料835）。一方、山城守の初見は、天正９年６月26日付け太田源五郎印判状写です（市史第一章編年史料845）。このように元亀年間から天正５年まで史料に散見された立川式部丞と藤左衛門尉は、その後には史料から名が見えなくなり、これに代わって天正８年からは伊賀守・山城守の名が見えるようになり、天正17年に至ります。つまり、このことから伊賀守・山城守は、式部丞・藤左衛門尉の後身であり、天正５年から天正８年の間に両人が北条氏から受領名を拝領したと考えられるのです。

ではこの両名は岩付衆の中ではどのような位置をしめていたのでしょうか。ここでは岩付衆の出陣に際して奉行

表2　岩付衆軍団編成

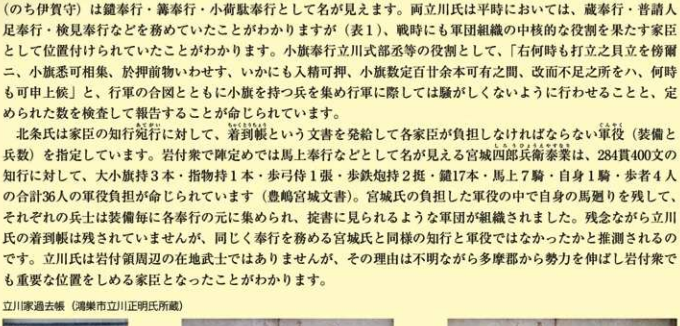
種別	人数	奉行人
小旗	120余	中筑後守・**立川藤左衛門尉**・潮田内匠助
鑓	600余	福島四郎右衛門尉・豊田周防守・**立川式部丞**・春日与兵衛
鉄炮	50余	河口四郎左衛門尉・真野平太
弓	40余	尾崎飛騨守・高麗大炊助
歩者	250余	山田弥太郎・川目大学・島村若狭守
馬上	500余	渋江式部少輔・太田右衛門佐・春日左衛門・宮城四郎兵衛・小田掃部助・細谷刑部左衛門尉
歩走廿人	20	馬場源十郎
陣庭		春日左衛門尉・宮城四郎兵衛・細谷刑部左衛門尉・福島四郎右衛門尉
籌		（一夜）春日左衛門尉・細谷刑部左衛門尉・**立川藤左衛門尉**
		（一夜）宮城四郎兵衛・福島四郎右衛門尉・**立川式部丞**
小荷駄		（一番）春日左衛門尉・福島四郎右衛門尉・**立川式部丞**
		（二番）宮城四郎兵衛・細谷刑部左衛門尉・中筑後守
合計	1580余	

を定めた天正５年７月13日付け北条家朱印状から立川氏の位置を見てみましょう（市史第一章編年史料829、掲載の写真参照）。

天正５年５月から閏（じゅん）７月にかけて北条氏は、下総国結城城（城主結城晴朝（はるとも））に対して攻撃を仕掛けています。結城氏への援軍佐竹義重・宇都宮広綱・那須資晴（すけはる）と激しい合戦を繰り広げ、北条氏政自身も閏７月に出陣して９月には帰陣していることから、この北条家朱印状での岩付衆の出陣命令は、この合戦に際してのものと見られています。この陣定めは、北条氏の軍事編成をよく示す有名な資料で、武具毎の軍団編成と担当奉行が記載されています。史料を整理したのが表２ですが、この中で立川藤左衛門尉（のち山城守）は小旗奉行・籌奉行として、式部丞（のち伊賀守）は鑓奉行・籌奉行・小荷駄奉行として名が見えます。両立川氏は平時においては、蔵奉行・普請人足奉行・検見奉行などを務めていたことがわかりますが（表１）、戦時にも軍団組織の中核的な役割を果たす家臣として位置付けられていたことがわかります。小旗奉行立川式部丞等の役割として、「右何時も打立之具立を傍爾ニ、小旗悉可相集、於押前物いわせす、いかにも入精可押、小旗数定百廿余本可有之間、改而不足之所をハ、何時も可申上候」と、行軍の合図とともに小旗を持つ兵を集め行軍に際しては騒がしくないように行わせることと、定められた数を検査して報告することが命じられています。

北条氏は家臣の知行宛行（あてがい）に対して、着到帳（ちゃくとうちょう）という文書を発給して各家臣が負担しなければならない軍役（しゅうやく）（装備と兵数）を指定しています。岩付衆で陣定めでは馬上奉行などとして名が見える宮城四郎兵衛泰業は、284貫400文の知行に対して、大小旗持３本・指物持１本・歩弓侍１張・歩鉄炮持２挺・鑓17本・馬上７騎・自身１騎・歩者４人の合計36人の軍役負担が命じられています（豊嶋宮城文書）。宮城氏の負担した軍役の中で自身の馬廻りを残して、それぞれの兵士は装備毎に各奉行の元に集められ、掟書に見られるような軍団が組織されました。残念ながら立川氏の着到帳は残されていませんが、同じく奉行を務める宮城氏と同様の知行と軍役ではなかったかと推測されるのです。立川氏は岩付領周辺の在地武士ではありませんが、その理由は不明ながら多摩郡から勢力を伸ばし岩付衆でも重要な位置をしめる家臣となったことがわかります。

立川家過去帳（鴻巣市立川正明氏所蔵）



3、その後の岩付立川氏

戦国時代の史料に散見された立川伊賀守は、同じく岩付衆のひとりで比企郡八林郷（埼玉県川島町）の土豪道祖土氏の系図（市史第一章編年史料881・882）にその名が見えます。これによれば道祖土下総守康成の娘の一人に「立川伊賀守妻立川石見守ヲ産」と記載され、立川氏と道祖土氏との姻戚関係と伊賀守に石見守という子が存在したことがわかります。この立川石見守は『新編武蔵風土記稿』の足立郡上谷村（埼玉県鴻巣市）に記述が見られ、新義真言宗宝性院の開基として立川石見守とあり、同村旧家弥七は石見守の子孫とされています（市史第一章編年史料879）。現在、宝性院は廃寺となり、薬師堂のみが残されていますが、市史編さんの調査で、この薬師堂には石見守三代孫の「立川勘兵衛」の位牌が残されていることが確認されました。また、同じく鴻巣市にはこの石見守の子孫の方がおられることも確認され、所蔵される二冊の過去帳から立川伊賀の法名、立川石見の法名と没年を新たに知ることができたのです（市史第一章編年史料883・884、P10掲載の写真参照）。水戸立川氏・常陸太田立川氏以外での子孫の存在の確認は、市史編さんの大きな成果のひとつといえましょう。ただし、立川伊賀守と立川氏文書の多摩立川氏との系譜関係は確認されませんでしたので、課題の解決は残されたままです。

令和２年４月～令和２年９月活動報告

月	日	活動内容
4月	4日	第１回・近世部会会議 第１回・近代部会会議
6月	19日	先史部会・向郷遺跡国立高校発掘資料の調査（くにたち郷土文化館）
	30日	先史部会・向郷遺跡国立高校発掘資料の調査（都立国立高等学校）
7月	3日	近世部会・普済寺墓石調査
	19日	第２回・近世部会会議
	25・26日	古代・中世部会・歴史民俗資料館普済寺蔵板碑調査
	27日	第１回・民俗・地誌部会会議

月	日	活動内容
8月	6日	第12回・編集委員会議
	7日	第１回・現代部会会議
	10日	現代部会・特定部会会議 古代・中世部会・普済寺六面石幢調査
	24日	第11回・編さん委員会議
	30日	第２回・近代部会会議
9月	20日	第３回・近世部会会議

※新型コロナウイルス感染症の拡大防止のため調査・業務を縮小しています。

資料・情報提供のお願い

古文書・絵図・地図・写真などの情報をおよせください

市史編さん係では現在、写真資料を特に集めています。古い写真からは、昔の街並みや当時の服装・生活様式を知ることができ、資料として活用できます。

写真の他にも古い日記、学校や企業の記念誌、チラシ・広告や、土地の変遷や街並みの分かる絵図、地図なども重要な資料になります。

「これも資料になるのでは？」と思うものがありましたら、ぜひ市史編さん係までご連絡ください。

市史編さん広報紙 たちかわ物語 vol.10

令和２年(2020)年９月23日発行
発行　立川市
〒190-8666 東京都立川市泉町1156-9
編集　産業文化スポーツ部地域文化課市史編さん係
〒190-0022　東京都立川市錦町3-5-22 YAZAWA DEUX ビル 201
TEL　(042)506-0021 ／ FAX (042)525-1601
E-mail　chiikibunka-t@city.tachikawa.lg.jp
URL　http://www.city.tachikawa.lg.jp/chiikibunka/sisi/hensanshitu/shishi_top.html
印刷　ぎょうせいデジタル株式会社
［市史編さん広報紙に関するご意見・ご感想をお待ちしています］

市史編さんHPはこちらからアクセスできます。

立川写真館

現代部会編

下の写真は、昭和46年(1971)に発行された「広報たちかわ」6月15日号に掲載された写真です。伝染病予防を呼びかけるポスターづくりに取り組んでいる南栄子ども会を取材しています。

カ、ハエ、ゴキブリも降参
伝染病予防にポスター作戦

広報たちかわ 昭和46年6月15日号3面記事と掲載写真
立川市歴史民俗資料館所蔵

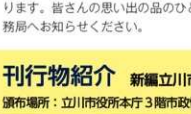
昭和46年当時の立川市では、ごみ収集は指定の場所・時間にポリバケツを使って行われていました。現在のように収集用のプラスチックごみ袋はなく、容器に直接生ごみ等を投入し繰り返し使用していたため、衛生面が問題視されていました。この問題の背景には、高度経済成長による人口の増加と消費の拡大があります。加えて、梅雨時から夏にかけては赤痢や日本脳炎などの伝染病が流行し、それを媒介する蚊やハエの発生も、社会問題として市民の生命に関わる深刻な影響を及ぼしていました。

南栄子ども会でのポスターづくりは、記事掲載当時で7年目を迎えています。「目で見る伝染病退治作戦」として、町内会や家庭単位で衛生面の改善、関心を高めていこうという趣旨があったようです。ポスターを作るにあたり、子どもたちは伝染病対策には何が有効か、または感染の原因は何かについて、よく勉強をして理解していることが広報のインタビューで分かります。今日、伝染病対策としての手洗い・うがい教育が今般の新型コロナウイルス感染症の流行にともない見直されてきていますが、この事例は当時の衛生教育のひとつの形が分かる資料であると言えます。(山下)

このような写真・ビラや冊子など、当時は日常のひとコマだったものが、時代の移り変わりを知る貴重な資料のひとつとなります。皆さんの思い出の品のひとつが、資料として活用できるかもしれません。情報をお持ちの方は、ぜひ市史編さん事務局へお知らせください。

刊行物紹介 新編立川市史刊行物は各種好評発売中です。

頒布場所：立川市役所本庁3階市政情報コーナー、立川市歴史民俗資料館、オリオン書房ノルテ店、ジュンク堂書店立川高島屋店



新編立川市史 資料編

古代・中世	B5判・カラー口絵16ページ・本文約600ページ・上製本・価格2,500円
現代1	B5判・カラー口絵4ページ・本文約580ページ・上製本・価格2,500円
柴崎の民俗	B5判・カラー口絵8ページ・本文約540ページ・上製本・価格2,500円
地図・絵図	A4判・フルカラー・約200ページ・上製本・DVD付・価格3,000円

ほか、各調査報告書も好評発売中！

令和3年3月刊行予定　新編立川市史 資料編　『近世1』『近代2』